

第7章 まとめ

植田地区の開発史

はじめに

植田地区は大分川の支流である七瀬川流域に開けた東西2.5^{km}、南北平均1^{km}ほどの平野で、雄城台の台地を取り巻く形で「く」字形に折れる。標高は最も上流に近い口戸で18^m、最も低い八幡田で12^mほどであるので、その差は6^mほどになる。周辺を見渡すと、北には比高50^mの雄城台の独立した低台地、西の上流側には比高50^mほどの木の上の低丘陵が、そして南から東にかけては七瀬川が取り巻くように東流する。その川を挟んで南側には標高596^mの霊山が聳えている。

このほぼ独立した小世界は、さらに豊後の政治的、あるいは宗教的な中心施設である国衙（現在の古国府周辺）や国分寺（現在の国分）にほぼ均等な距離を保っている。特に、国衙に近いことが、この植田地区の歴史的位置を左右したであろうことは想像に難くない。古代における大分郡植田郷、あるいは平安時代後期に成立した植田荘などはそのような中で展開を遂げたものと考えられよう。

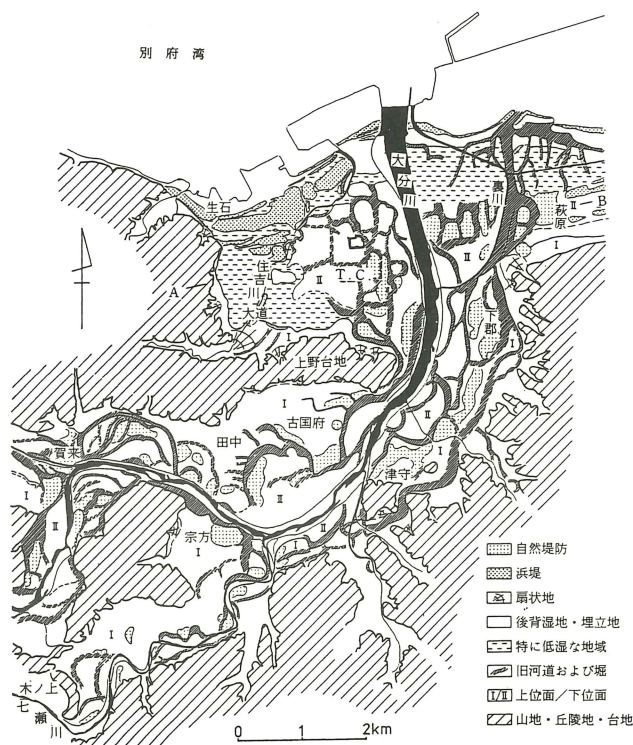
ここでは、そのような歴史的位置にあった植田地区の前史、そして展開期の開発史について、段階を追って見ていきたいと思う。

弥生時代から古墳時代の様相

縄文時代以前については資料が少なく言及できないので、ここでは資料の増す弥生時代中期以降から始めたい。⁽¹⁾ 弥生時代

中期後半には、雄城台丘陵の南東裾部の深町遺跡で水路と考えられる溝が発見されている。この溝は幅6^m、深さ2^m前後の大きなもので、調査区内で総延長約55^mのL字形に検出されている。この地区は、いわゆる「深田」の広がる地点であり、玉沢地区と植田地区の平野部の中では低く水の集まりやすい場所で、また雄城台丘陵から流れ下る谷の出口にあたる。そのため湿田となっていたのであろう。それを考えると、深町遺跡で発見された溝も、この湧水を利用するものであった可能性が考えられるが、規模が大きく小河川からの引水を考えたほうが良いであろう。弥生時代中期後半には、河川からの灌漑を行うかなり限定的な水田が築かれていたものとする事ができよう。洪積台地上の猪野中原遺跡（大分市）で弥生時代中期の溜井跡が発見されたが、このような規模の土木工事が沖積地においても当然なされたと考えられる。

次の弥生時代後期には、雄城台の丘陵上に大規模な環濠集落が形成される。⁽²⁾ 残念ながら、報告書が出ておらず詳細な時期は不明であるが、少なくとも古墳時代初頭までは集落は維持されていたようである（概報）。この集落では廃棄された住居跡の埋土から後漢鏡片が2つ出土している。また、丘陵南側に入る谷の谷頭の斜面では銅釧も発見されている。このように、雄城台遺跡の環濠集落は大分平野を望む台地上に立地する守岡遺跡や尼ヶ城遺跡などと並んで拠点集落として理解されている。従来この時期、つまり弥生時代後期には大規模な集落



第80図 大分川下流域の微地形分類図（千田氏原図）

『大分川流域』7ページ

は大分平野などの沖積地ではなく、そこを望む台地上に高地性集落として展開すると考えられていたのである。しかし、最近では七歩川流域に開ける下郡地区の沖積地や大分川と賀来川の合流点付近の賀来遺跡から沖積地の微高地上に立地する集落が発見されており、またこの植田地区でもガランジ遺跡で弥生時代後期の住居跡が見つかる。このことから、この時期の集落立地は政治的のものというより、自然環境の問題が大きく、大分川のような中規模な河川流域は河川の氾濫や、水田面からの比高差などにより可耕地が少なく、七歩川や賀来川などの小規模な河川流域のほうが水田として利用しやすかった可能性を示している。

この植田地区では弥生時代後期後葉には植田市遺跡や北の後遺跡で水路と考えられる溝が発見されている。この溝でどこから導水したのかは不明であるが、七瀬川や大分川から直接引水したとは考えがたい。おそらく前時期に引き続き丘陵の所々に発達した谷からの小規模河川の水を集めたものであった可能性が高い。それによって形成される水田は当然ながら大規模なものとはなりえなかった筈である。しかし、この段階の水田遺構は確認されていない。植田条里H区の旧河道と考えられる溝は、弥生時代後期には埋没しており、旧河道の利用も当然考えられよう。

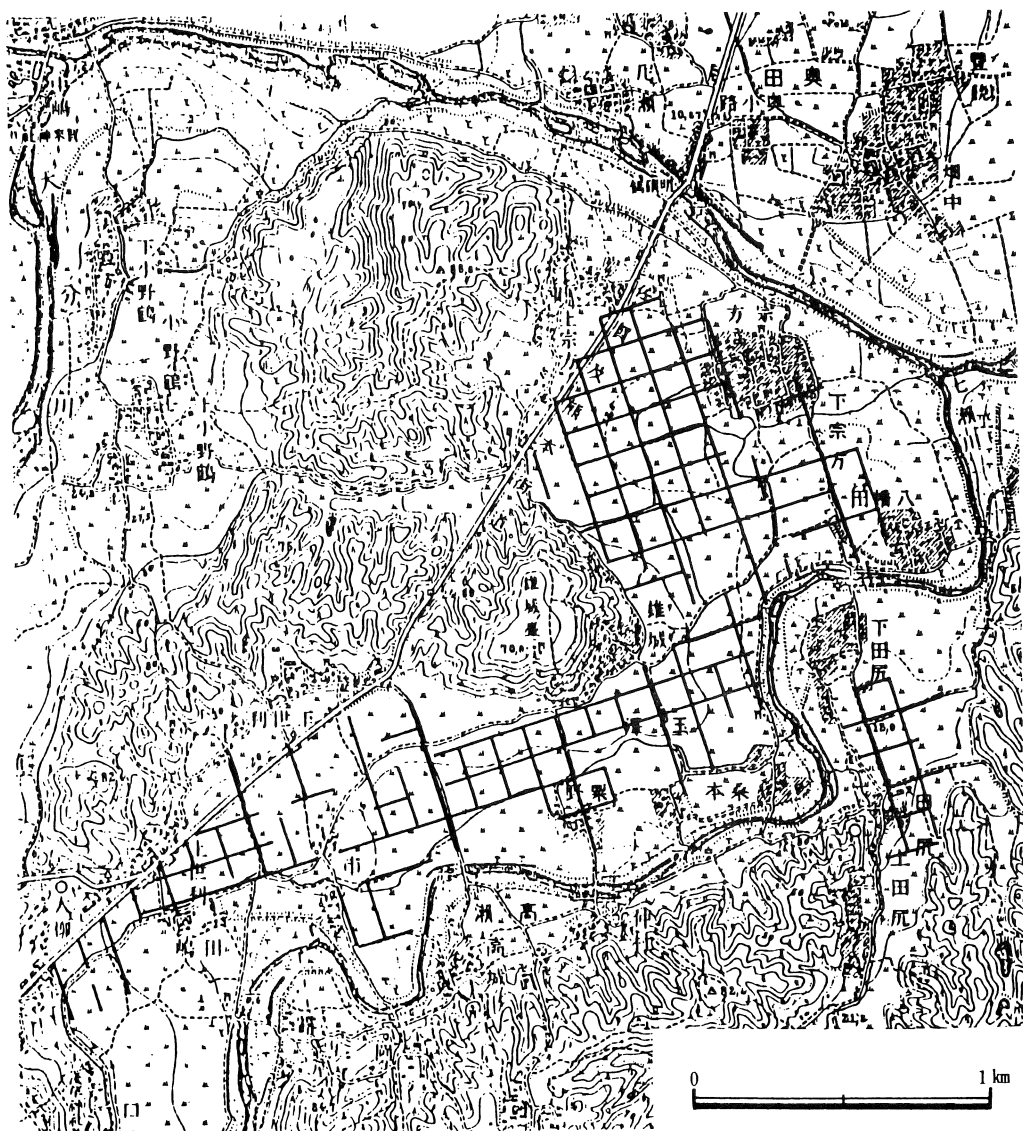
弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて台地上に立地していた集落は、古墳時代前期（庄内新段階から布留古段階）に沖積地に下りてくる。植田条里遺跡D区の集落はその一部分を調査しただけであるが、調査区外にも住居が多く展開する可能性もあり比較的規模の大きな集落と考えられる。また、植田市遺跡ではやはり、弥生時代終末から古墳時代前期に水路が掘削され、溝内部からは植田条里遺跡D区溝1から出土した遺物とほとんど同時期の遺物が大量に出土している。この両者の間隔は500mほどあり、両者の水路が直接的につながりを持つのかどうかはもちろんわからない。しかし、ほぼ同時期に同規模の水路が掘削されているのは注意してよい。七瀬川からの井堰灌漑の可能性が高いこの水路は、植田市遺跡の中では幅4m（ただし、当初の掘削では幅2m程度である）で、深さは1.6m前後である。弥生時代終末から古墳時代初頭に掘削された後埋没し、古墳時代前期（布留式古段階）に掘り直しがなされ、またすぐに埋没するという。この水路からは水田に直接水をかける枝溝が掘られており、植田市遺跡内に水田の存在が推測されている。（ただし、上部が削平されており、確認できていない。）植田条里遺跡H区では、弥生時代後期の遺物を含む旧河道と考えられる落ち込みに溝が掘られており、水路の設定にあたって旧河道が利用されたことを示している。

この状況は古墳時代後期になって一変する。沖積地内の微高地に立地した集落は一部を残して姿を消し、かわりに段丘下の扇状地などに立地するようになるのである（北の後遺跡や六反田遺跡）。そして、沖積地では微高地を除く部分に、かなり大規模な水田が広がっていたものと想定される。すなわち、植田条里遺跡の各区や植田平石遺跡で確認された水田跡がそれである。これらの水田は、調査区内でも低湿地部分にのみ広がり、微高地上には及ばない。（あるいは、この水田部分は旧河道であった可能性も高い。）水田のある場所が沖積地の中央部に近い部分であることから考えてこの段階でも七瀬川や大分川から直接的な引水（井堰灌漑）をおこなった可能性も高いが、植田条里遺跡内では水路跡は確認されておらず不明とせざるを得ない。しかし、植田市遺跡で確認された古墳時代中期から後期の水路は、前時期の水路をしのぐ規模で、総延長約200mにわたって確認されており、この水路の延長線上にある植田条里遺跡や植田平石遺跡の水田が、これと関連無しに作られたとは考えがたい。植田市遺跡で検出されたこの時期の溝は、5世紀後半から7世紀中葉までの遺物を含み、幅10m、深さ1mほどで、何度かの掘削を繰り返している。この大溝が沖積地の微高地を縫うように流れ、面的に広がりを持つ水田を築きあげていった可能性が高い。この植田の平野における大きな画期である。

この現象は高橋学氏による地形環境分析結果とも一致する。すなわち、高橋氏は、古墳時代後期になると「相対的に高燥で集落の立地していた微高地が低湿化し居住に不向きになり」、「かつて集落が存在したところにも水田が拡大され、ひとつづきの水田域が形成され」という。それは「河川の小規模な氾濫が繰り返され、それまで存在した微起伏を埋積し始めた」ためであるという。植田地区では微高地には水田が認められないものの、基本的にはこの七瀬川流域の植田地区にも当てはまると考えてもよいのではなかろうか。

条里の成立

この植田地区には条里遺構が顕著に残っている。ほぼ二百町に広がっており、阡線の方位は西方向に14度ずれている。現在、古井路と呼ばれる水路と嘉永井路と享保井路によって給水を受けている部分に分かれる。前者を「植田条里」後者を「宗方条里」とすると、その水路名称からわかるように後者は江戸時代後



第81図 出田氏による条里の復元（『大分川流域』240ページ）
〈ベースの地形図は大正3年測図〉

期に宗方の丘陵を越えて大分川の野鶴から水を引くものであり、江戸時代の開発地（再開発）である。

前者の古井路は、平安時代末期の建久3年（1192）に「南木上長者」が「佃」に水を引くために築いたとの伝承を持つ。現在「佃」という地名（小字）は条里を外れた地点にあるが、この「佃」には古井路の水が掛かる。つまり、条里の西の端（小字堺の坪）より西側には現状では条里区画はまったく見られないが、現在ここにも古井路の水が掛かっているのである。これは、本来条里区画があったものが河川の氾濫によって乱されたと考えられるのか、あるいは本来条里区画は「佃」の周辺には及んでいなかったものか、どちらかであろうが、後者の可能性が高い。つまり、前記の伝承は条里区画の及ばない「佃」周辺（畑地、あるいは空閑地）に水を引くため、古井路の取水口を変更した事の反映と考えられるのである。つまり、本来の井堰は現在のものより下流側にあって、本来的には堺の坪あたりの条里部分までしか及んでいなかったであろう。⁽³⁾

植田市遺跡（河川改修地区）では、条里に沿う奈良時代から平安時代前期の溝が検出されている。ごく僅かであり、この溝が条里とどのような関係にあるのかはわからないが、後述の11世紀から12世紀の溝より南側を流れているのが注目される。つまり、この溝が幹線水路であれば、「堺の坪」より西側部分にはやはり水がかからなかった可能性があるのである。

ところで、現在の条里区画の見られる部分の水掛かりは、単純化していえば東西に長い沖積地の中の中央部付近に排水路が西から東へ流れ、それを挟むように2本用水路が東西に延びている。つまり、中央部付近がやや低く、南北両側がやや高いのである。そして、この南側の用水路は江戸時代の慶安年間(1648-1652)に古井路から別れたものといわれ、そうすれば、条里の南側半分に水が掛かったのは江戸時代以降ということになる。そう考えれば、条里水田は(区画のみ存在した可能性もあるが)さらに狭い範囲に限定されることになる。

一方宗方条里はどうであろうか。前述のように、江戸時代に大規模な水路の掘削を臼杵藩がおこなっており、それ以前の状況は不明であるが、地形的にもあるいは古井路の水の量から考えても、古井路から水をとるのは難しい。そうすれば、別系統の水路を想定せねばならない。それは、古井路とは異なり、大分川からの取水ということになろう。そうすれば、現在の小字「北の後」の部分の丘陵が大分川に張り

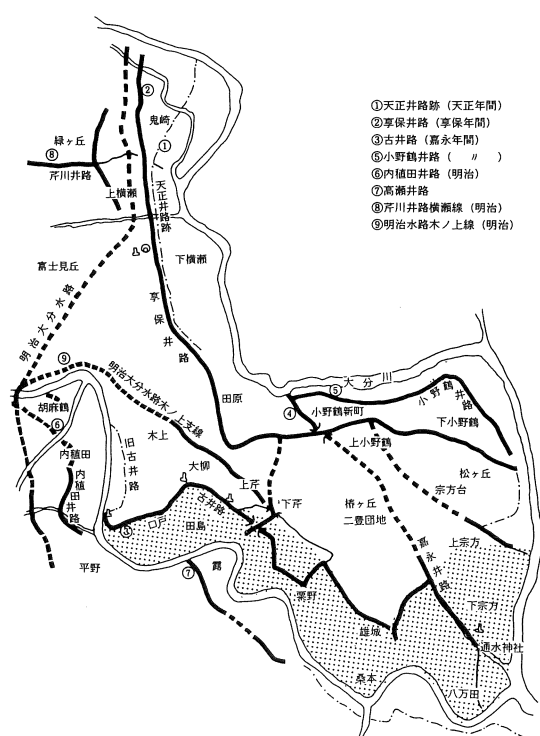
出している部分を取り巻くようにして上流側から水路を延長していた可能性が考えられる。⁽⁵⁾ 古老の話では、「北の後」の部分に以前水路の跡があったということであり、また江戸期の水路が一端「北の後」の部分まで水を回していることを考えても、玉沢条里に掛かる水は「北の後」あたりが最も初めの地点になるのであろう。そして、江戸時代には水の不足を補うために、丘陵の上を掘割や隧道を掘って大分川から引水をしたのである。

このように考えられるとすると、この植田地区には別系統の水路を持った2つの条里が存在したことになる。ただし、現在の資料では平安時代末以前に植田条里が成立していた可能性が指摘できるに止まる。しかし、大分郡植田郷がこの地を中心として成立したものであることは少なくとも言えるのではなかろうか。

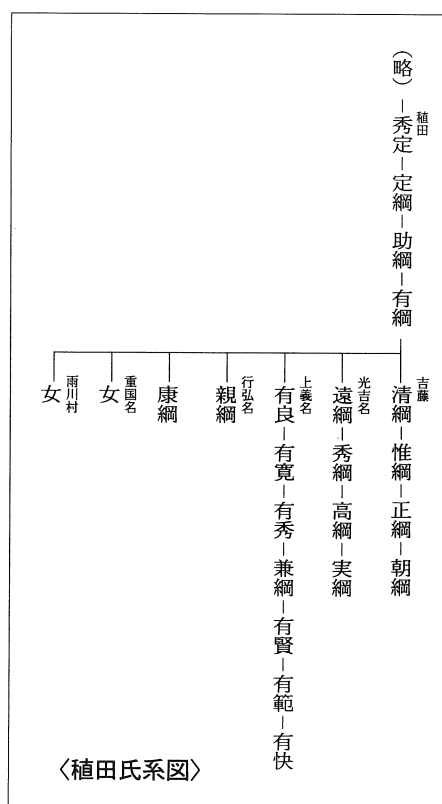
植田荘の成立と展開

植田荘の文書上の初見は保元2年(1157)の「太政官符案」で、保元の乱で敗死した藤原頼長領を没官し、後白河天皇の後院領とした中に植田荘(「植田荘」と誤記)が見える。また、大神系図によると、植田有綱は源平合戦の勲功の賞として吉藤名野津原郷を賜った、とあり、少なくとも平安時代の末から鎌倉時代初めにかけて、後に「植田」を名乗る大神系一族がこの地に足がかりを得ていたことがわかる。しかし、系図上の植田氏の祖である季定は、すでに植田を称しており、大神氏の他例からみて、平安時代後期の段階で郷司などとして、植田郷とのつながりが生まれたと考えるのが適切であろう。

弘安8年(1285)の図田帳によると、植田荘は10の名に分かれ、それぞれに地頭があり、領主的支配を行って



第82図 七瀬川流域の水路図(『嶺北の文化財』より、一部改変)



いたことがわかる。大神系図によると、前述の有綱の子、清綱、遠綱、有良、親綱、女は各々、吉藤、光吉、上義、行弘、重国を領有していたが、弘安の段階では吉藤名は大友親秀の三男能泰に、光吉名は遠綱の三代後の實綱の時欠所され大友親泰にそれぞれ地頭職がわたり、上義名のみが有良の子孫に伝えられていた（行弘名は弘安図田帳に地頭の記載が無い）。重国名は「有綱跡」と記載されており、女に伝えられた後、一期分で返されたものであろう。図田帳によると、上記の4名以外に植田氏一族が地頭であるのは乙犬名だけである。

南北朝期になると、有良の系統である靈山寺院主有快がでて、上義、乙犬、上乙犬、下永富、吉藤、福重渡地内地行地半分地頭職を兼帯するに及んで、植田氏の最盛期を迎える。この流れを見ると、本来惣領家は七瀬川上流域の吉藤名が本貫地であったのが、後に大規模な平野が展開する現植田地区に本貫地を置く有良流が勢力を伸ばしていったことがわかる（名の比定地については後述）。この点は、靈山寺や高瀬石仏などの存在も考慮に入れつつ、広い平野での沖積地の安定化に伴う水田開発というプロセスと表裏一体のものである可能性を探る必要がある。

次に、前述の点を確認するために「名」の現地比定を行う。これまでに各氏により比定が試みられており、一覧表にまとめてみると右表のようになる。⁶⁾ これから見ると、現在遺称地名などからはほぼ間違いないと考えられているのは、吉藤名、光吉名、千歳名などである。もっとも大きな名である乙犬名と上義名は、遺称地名がないことから苦労しているが、佐藤氏は寒田から旦野原地区に比定している。しかし、植田荘325丁余のうち3割強を占めるふたつの名が条里区画のある植田中心部を外れることは考えがたい。そうすれば、植田地区には2つの系統の水路があったことが注意される。すなわち、古井路の水掛かりの「植田条里」と、大分川からの水が掛かる「宗方沢条里」である。もちろん、名が単系の水路によって形成されていたとの確証はないが（散在名ということも考えられる）、両者が上義名と乙犬名に比定される可能性は高かろう。その場合、北の後の南西隣の小字「乙院屋敷」が注目される。「乙院」と

「乙犬」は転訛するのはたやすく、さらにこの「乙院屋敷」が中世以来の、中央部分に館的区画を有する「ムラ」の形状を呈していることも加味すると、この乙院屋敷は名主か小地頭の居館を中心とした「ムラ」であった可能性が考えられるのである。時代は下るが、文禄年間写しの「植田荘名々給人注文」に「乙犬名之事、是ハ田数ひミつにて候、乙犬名六十五貫分雄城無多」と見えるので、「雄城無多」が何を指すのかは不明であるが、乙犬名と雄城（今の玉沢地区にある雄城台周辺）との関係を示すものとして、乙犬名の位置比定に一つの傍証となるだ

(種)
上田莊三百三拾五丁二段 領家大納言一位御局
上義名五拾六町六段 大輔房有秀
乙犬名六拾丁八段 同人
吉藤名四拾丁 豊前大炊三郎藏人能泰 道法名
永富名十六町一段三百廿歩 同人
行弘名三拾七十一丁
松武名十六丁二段半 松尾彌二郎惟泰跡、當知不分明、
千歳名拾八丁七段 相模國御家人川村新五郎清秀 法名戒惠、今戒本云
重國名拾五町三段 植田八郎有綱跡、而四條侍從殿知行、而當國住人
長谷王入道信覺
光吉名五拾二丁 大友兵庫入道殿
福重名十八町二段大 利根二郎頼親

〈豊後国図田帳抜粋〉

名	渡 辺	佐 藤	日本地名大辞典 (角川書店)
上義名	?	大分市寒田	靈山周辺
乙犬名	?	大分市旦野原	靈山周辺
吉藤名	野津原町	野津原町	野津原町
永富名	大分市秋岡・岡	大分市内植田	大分市秋岡・岡
行弘名	?	野津原町	?
松武名	?	大分市横瀬	?
千歳名	大分市木の上	大分市木の上	大分市木の上
重国名	?	大分市宗方	大分市石川?
光吉名	大分市光吉	大分市光吉	大分市光吉
福重名	?	野津原町	?

「名」比定地一覧表

ろう。

そうすれば、大分川から引水された宗方条里の部分は乙犬名に比定され、残りの植田条里は上義名に比定できる可能性が高い。この両名とも、前述の通り鎌倉時代後期から南北朝期には植田氏の庶流のなかで最も有力な霊山寺院主の系統が地頭職を保持しており、大規模な水田が展開するこの平野部は、植田氏の荘園経営の中核になっていた場所としては最も相応しいのである。また、この「乙院屋敷」の近くに植田大明神社が存在すること、これもこれを支持する。この植田大明神社は、社伝によると植田忠綱が「宮ノ迫」（宗方台）に勧請したものであるといい、江戸時代の「豊後国志」には忠綱を祭神としてあげており、御霊的な神社としている。これは、忠綱が吉藤名地頭で植田氏の惣領家の人物であるが、忠綱は大友親秀の三男能泰の子朝綱を養子として養っていたが、すぐに忠綱は亡くなり家臣に家督争いが生じた（これ以後植田氏惣領家は太友系となる）。これらのことからすると、忠綱が非業の死を遂げた人物として、植田氏内部で祭られる要素があり、それを有良流の植田氏が有力となるに伴い、乙犬名のほうへ勧請したことが考えられる。

このように乙犬名と上義名の位置を考えると、上義名の水田を望む南側丘陵の裾部に高瀬石仏が築かれる理由も説明できそうである。⁽⁷⁾ つまり、上義名には領主の直営田である「佃」を含んでいること、さらに前記した古井路の伝承も加味すると植田氏の平安時代末段階の開発がこの上義名の条里区画水田の再開発にあったことが推定できるであろう。そこに平安時代末（鎌倉時代中期まで下るという説もある）と考えられる石仏が作られているのである。無関係とは考えがたい。

植田市遺跡1991年度調査区からは11、12世紀と考えられる溝が検出されている。現在の古井路とは微妙に重ならないが、大局的にみればその前身である可能性は高い。この溝は西（上流側）に延長すれば「佃」の方へ向かい、そうすれば、前記の伝承（佃への引水）がある程度史実を反映したものである可能性がでてくる。

その他の名については、今回の調査範囲からは大きく外れる可能性が高く、今回は言及できない。

ところで、南北朝期の建武3年（1336）、植田有快の館が南朝方によって焼き打ちを受けると言う事件が起こる。これは、南朝方が国府（高国府）を目指して植田荘にある霊山寺に盾籠った時に起こった事件であり、霊山寺から高国府への経路上に有快の館があったと考えられる。この時には館とともに「在家数十軒」が焼かれている。このことは「館」と在家の位置が近かったことを示す。つまり、ある程度の集村形態が成立していたと考えられるのである。では、この有快の館はどこであろうか。これは前述した通り、「乙院屋敷」周辺をその地点とする可能性があるのである。残念ながら発掘調査では削平が著しく、中世の遺構は検出されなかったが、この場所は宗方条里への水の掛かりの最初の地点であると同時に、大分川渡河地点でもあり、高国府（守護所）の防御ラインを形成するとともに領域支配の拠点的位置にあるのである。

このような集村形態をなす「ムラ」は、この植田・宗方地区には10箇所ほど見られる。このような「ムラ」には方形の区画が見られる場合が多い。桑本では方50[㍎]ほどの堀を巡らせる遺構が現存し、下宗方では方1町程度の方形区画が認められる。

一方、市の集落では、現在の集落からやや外れる地点で発掘調査により南北55[㍎]、東西60[㍎]の屋敷遺構が検出されている。この15世紀後半から16世紀にかけての屋敷遺構は、結局江戸時代以降の「市」集落と何ら重なりを持たなかった。これは、この屋敷遺構の地名である小字「園田」に象徴されるように、個別小規模開発のための拠点である可能性が高く、植田氏滅亡以後戦国期にこの植田荘が太友家臣の給地として様々な人々に分割されたことと関連が深いと考えられ、結局それ以前の在地との繋がりのなさが、この遺構を限定的な位置に置いた要因であると考えがたう。つまり、逆に考えれば、他の「ムラ」の痕跡は戦国期に大きな改変を受けた可能性は高いものの、それ以前から在地との繋がりの中で存続した、言い換えれば支配や経営、あるいは防御のための拠点としての位置づけが与えられよう。それらは、田染荘尾崎屋敷で検証されたように名主（小地頭）や百姓名主などの屋敷を中核とする同族集団の結合体の、平野部における典型的な一居住形態と理解でき、それらが散在する景観が、中世後半期にこの地区における景観であったとすることができよう。⁽⁸⁾

なお、江戸時代になると特に臼杵藩領において井路の掘削をしばしば行い、平野部の全面水田化を推し進めた

事を付記しておく。

まとめ

大分川の支流である七瀬川流域に広がる植田地区の開発史について、弥生時代から中世までを見通して記述してきた。必ずしも資料的に十分とは言えず、多くは今後検証が必要なところである。

ところで、植田地区と宗方地区は一続きの平野であるが、水系が七瀬川と大分川本流というように異なり開発の歴史も異なる。しかし、弥生時代後期後葉の水路の存在、古墳時代後期の水路や水田の存在など共通点も多い。つまり、個別の開発とは言うもののその画期についてはほぼ同様であったことを示している。

最後に、この地域でおおまかな展開の過程を描いてきたが、この事が他地域の発掘事例からみて、どのような位置にあるのかを検討してまとめとしたい。

まず、深町遺跡の溝から推測されるように、弥生時代中期後半には小河川を利用した小規模な灌漑施設をともなった水田が沖積地の限られた部分に営まれたと考えられる。

そして、弥生時代後期後葉には、植田地区を始め、県下の多くの遺跡で溝が確認されるようになる。その溝は集落を画するいわゆる環濠と、水田に水を引く水路とに大きくは分けられよう。そのどちらであるかはなかなか判断できない場合があるが、確実に水路と言えるものは、直入町の長野津留遺跡、大分市北の後遺跡、日田市三和教田遺跡B地点⁽⁹⁾などである。長野津留遺跡の溝は、小規模な平野の端で幅約3m、深さ2mのV字形の溝を掘削するもので、明らかに河川からの水路と考えられるものであった。このようにこの時期に出土例を増す鉄器（刃先）を利用して以前より明確な、そして規模の大きな溝を掘削するようになったのは注目して良い。いずれも後期後葉には掘削されており、短期間で放棄されるか、あるいは古墳時代前期まで掘りなおして使用されている。そして、最終的に遅くとも古墳時代前期、布留式中段階には廃棄されるのである。この事は、水路の取水口（井堰）の位置の変更を迫られるような環境変化がかなり広範に起こったことを示すと考えられるであろう。

古墳時代初頭になると、中規模河川流域でも集落は洪積台地からおり、沖積微高地に立地するようになる。この段階では、沖積地の安定化が進んでいたものと考えられよう。しかし、これらの集落は150年間ほどの間存続したあと中期中頃になると姿を消す。

植田地区では古墳時代後期になって、はじめて水田跡が確認される。この植田の平野では植田市遺跡の水路を基幹水路と考え、平野のかかなりの部分で水田化が行われたと推測した。この水田はかなり広範囲に存在することが想定できるが、それでも、ところどころの微高地は水田とはなっていなかった。集落は、丘陵の裾に近い比高数mほどの段丘上や微高地に立地する。この時期、県下各地で広範に横穴墓が築かれる。かなり小さな谷部の丘陵崖面や、大規模な平野を見下ろす崖面などに横穴墓が穿たれるが、これは様々な地形に応じた水田開発が進行しつつあった事を裏付ける現象であろう。

この地区は、その後古代では植田郷が、中世には植田氏を開発領主として植田荘が成立した。今回の発掘調査で、また県下各地の条里発掘調査で、その成立時期を確定できる資料は得られていないが、古墳時代後期に出現したかなり規模の大きな水田が、条里出現の前提として、各地に存在した事は確かであろう。

ところで、植田郷の中心部は植田から宗方地区にかけて広がる条里部分であると考えられるが、郷の中心的な施設と思われるものは発見されていない。しかし、植田市地区には印隘社があり、一説では国府の存在も指摘されてきた。植田市遺跡では該期の顕著な遺構は出土しておらずこの地区が中心的地域であったということは考古学的には確認できないが、ここが条里地割りの西限のすぐ外側に当たり、近世になるまで十分に水がのらない微高地であったことを考えれば、条里水田をまじかに望むこの地区に何らかの施設があったと考えても不自然ではない。

中世になると、植田荘の成立が条里部分を中心とした地区にあったことは前記した通りである。条里地割りがいつ成立したのが考古学的に確認できないので、その成立の契機が「再開発」にあったのかどうかはわからないが、その可能性は高い。いずれにしても、現在の水路による灌漑体系が、中世を通して形成されたものである

ことは間違いない。それでも現在見られるような全面水田化には至っていなかった。この点は山間の谷間に展開する田原別符などでも指摘できる点である。しかし、これは決して中世の水田造成技術の未熟さにのみその要因を求められるものではなく、むしろ中世には沖積平野の多様な利用を積極的に行っていたと考えたほうがよい。近世という在地においては完全な水田中心社会への移行が、それを推進する力であったと考えておきたい。その結果、江戸時代には補完的な水路が山を削り隧道を穿って作られ、平野部の全面水田化に寄与したのである。

註

- (1) 植田市遺跡（河川改修地区）や植田平石遺跡で刻目突帯文土器が出土しており、初期稲作に係わる可能性があるが、いずれも遺構がなく様相は不明と云わざるを得ない。しかし、この時期に沖積地に立地することは注意してよい。
- (2) 集落としてはすでに中期から存続するが、環濠を持つようになるのは後期になってからである。
- (3) その場合、小字田嶋前と田嶋に挟まれた七瀬川から細長く伸びる地割り（小字大津川原）が何らかの痕跡を示している可能性が高い。これを延長すると「市」の集落で急に方向を変える「古井路」の延長線上に位置するもの、この地割りが旧水路であった可能性を示していると言えよう。
- (4) 現在の「古井路」取水口に立つ明治39年の記念碑に次のように記されている。「古井路建久三年壬子三月竣功或傳木上村南長者所開鑿也慶安中木上口戸両村里正相商而変水口加修理使栗野村某桑元村某監其工自木上桑元流域壹里余諸村到干今襲其利焉恐久而訛其實水畔建是碑畧記由来以傳不朽云 明治三十九年三月」植田条里遺跡B区の溝2の江戸時代の水路はそのことを裏づけるものであろう。
- (5) ただし、「北の後」の発掘調査では、古代・中世の水路跡は検出されていない。発掘調査区のさらに山側を通っていたのか、すでに削平を受けていたのかは判断できない。もちろん、今後は本来この地点からの導水がなかったことも考慮に入れる必要があろう。
- (6) 各氏の各比定は下記文献を参照した。
渡辺澄夫「豊後国莊園公領史料集成五（下）」所収の解説
佐藤満洋「中世の植田荘と植田氏」（『郷土史野津原』1980年）
- (7) ただし、渡辺澄夫氏が言われるように、永富名が高瀬であれば、吉藤名とともに植田惣領家の所領であった永富名と高瀬石仏との関係を考えねばならない。その場合でも、対岸の条里地区の再開発は植田氏にとって、必然的になされるべきものであったはずであり、後に「上義名」として成立したこの地区が当初惣領家との係わりなしに成立をしたとは考えにくい。
- (8) 今回や、他の様々な発掘調査では、条里区画内において中世の集落遺跡は検出されていない。このことは、大局的にみると中世にはこの植田地区の沖積地（現在の集落部分を除いて）に広範に集落が点在した可能性が低いことを窺わせる。換言すれば可耕地としての利用が大きく進んでいたことの証左である。未だ調査例の多くない条里外の部分や、近世に水田化が進んだ可能性がある部分の発掘調査で、中世の痕跡がどのようなものか注目されよう。
- (9) 調査者は集落を画する溝としているが、古墳時代後期にほぼ同位置で水路が掘削されており、溝埋土からも水路と考えたほうが良いと考えられる。